

宇宙生命哲学

ことばはじめ

31

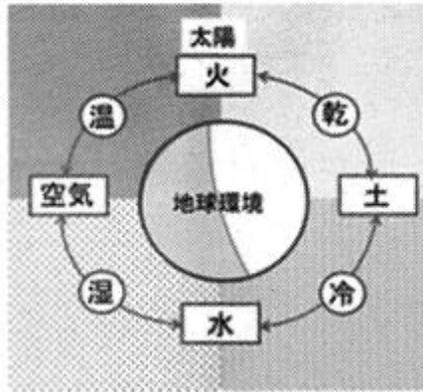
北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤 俊洋

現代に蘇る古代ギリシャの四元素説

今から約2400年前、古代ギリシャの哲学者・デモクリトスは、「万物のもとほそれ以上分割できない無数の原子であり、その離合集散によって、すべての物質が作られている」という原子仮説を提唱した。この説は、現代の原子論に比べても極めて先見性のある説であったが、当時の社会には受け入れられなかった。

一方、古代ギリシャの哲学者の間では、万物の根源として、火、空気、水、土を四元素とする説が生まれ、中でもアリストテレスが提唱した「四元素説」が広く認められていた。4つの元素を「単純物体」と呼び、これらが、乾・湿と温・冷という対立する2対の性質で組み立てられていて、火は温と乾、空気は温と湿、水は冷と湿、土は冷と乾という性質から構成されているとした(図)。乾・湿と温・冷は、いずれも人間社会の環境状況の表現であり、火・空気・水・土は、ごくありふれた身の回りの物質である。実際に体感する環境の状況の組み合わせを目に見え

る物質として表現し、四元素を万物のもととしたことから、この説は、ギリシャ・ローマの医学、薬学の重要な理論となり、さらにアラビアに伝わりその後、2000年の長きに渡り世界の科学界に君臨した。古代から中世の化学は、錬金術などの暗黒の時



アリストテレスの四元素説と生命現象を支える地球環境の関係

代を経て、次第に実験装置や測定技術が進歩し、1700年代になると、化学反応に関わる物質の質や量を正確に測定することができるようになった。1803年には、ドルトンにより近代原子論が発見され、近代科学が誕生した。この時をもってアリストテレスの四元素説は、歴史の表舞台から姿を消すことになるが、地球上における生命の循環の考え方で、装いを新たに再登場することになる。

地球上の生命現象とは、太陽エネルギー(火)を基盤にして、水と二酸化炭素(空気)とミネラル(土)が織りなす、過去から現代、現代から未来へと繋がる壮大な物質循環の世界と考えることができ

る。この4つの要素、火・空気・水・土(ギリシャ時代の4元素)が循環することにより、地球環境が健全に保たれているという考え方(アリストテレスは、生命の循環についても気がついていたら?)が、すでに遠い古代ギリシャ時代に培われていたことを思うと、当時の哲学者たちの直観力と想像力の鋭さは、現在の最先端の科学者たちの感性に勝るとも劣らなかつたのではないかと思う。